



赤ちゃんの頃から努力していたらいつの間にか

世界最強の魔法使いになっていました

著 taki210

✧ エリザベート ✧

隣国ブリターニャの王女。
しっかり者だが、恋愛事になると周
りが見えなくなる一面がある。

✧ デーブ ✧

帝国から追放された元第六皇子。
ルクスへの復讐に燃える。

✧ セイラ ✧

ルナミアの側近。
忠誠心が厚い。

✧ ルナミア ✧

エルフィーヤ王国からやって
きたエルフの王女。
引っ込み思案な性格。

✧ ルクス ✧

生まれを理由に『無能皇子』と呼ばれて
いる本作主人公。規格外の魔力を手
に入れて頭角を現し始めたのをきかけ
に義兄たちの皇位継承争いに巻き込
まれていく。

第一話 エルフとの出会い

「ああ……寒い……どうしてぼくちんがこんな目に……」

「あなたがへましたからでしょ、このバカ息子。ああ、私たちはもうおしまいだわ……」

森の中に建てられたボロボロの小屋の中で、二人の人物が震えていた。

元皇子のデーブ・エルドとその母親である。

自分の手を汚さずにルクスを暗殺しようと企んでいたデーブだったが、その計画は失敗した。さらには禁制品となっていた魔道具を持ち出したことが判明し、二人は帝都から追い出されることとなった。

これまで皇帝のガレスは、皇子がいかなる策略を巡らして誰かを陥れても、卑怯な手段を企てても見過ごしていた。基本的に、皇子たちの権力闘争に関して不干渉を貫いているからだ。

だが、この魔道具の持ち出しだけはそんな皇帝であっても看過できなかった。

禁じ手を用いながらも暗殺に失敗し、その罪を秘匿^{ひとく}するために皇帝の前で嘘を重ねたことで、デーブの皇帝からの信用は失われ、皇位継承権も剥奪された。

いまや彼らは身分を落とし、庶民になっている。

わずかな従者とともに国外を目指して移動していたが、その道中で、盗賊と思しき集団に襲われ

ることもあった。

だが、こうなることはデーブもある程度予測していた。

見た目は盗賊ではあるものの、彼らの正体は皇帝が仕向けた刺客に違いない。

平民落ちしたデーブとその母親が帝国内にとどまることを、皇帝は許すつもりがないのだ。

盗賊に襲撃された時、これは皇帝による口封じだとデーブは悟った。

皇帝は弱者には容赦がない。

亡命したデーブが他国へわたり、帝国の機密事項などを漏らさないように、二人の抹殺を企てたのであることは、容易に想像がついた。

二人に最後まで付き従った騎士たちは全員死んでしまったが、デーブと母親の二人だけは、運良く生き延びることができた。

そして逃げた先の国境線沿いにある深い森の中にあったこの小屋で、二人はこれまで身を隠しながら密かに生活していたというわけだ。

狭い空間には調度品も何もなく、身の回りの世話をしてくれる召使いも当然いない。

必要なものは自分で調達しなければならなかった。

後宮にいた頃からは考えられないような貧しい生活に、二人の精神はどんどん疲弊していた。

「母さん……ぼくちゃんお腹すいたよ……食べ物……？ 何か食べ物は……？」

「あるわけないでしょ！ あんたが自分でとってきなさい！！」

「なんで皇子であるぼくちゃんが自分でそんなことをしなければならんだ！」

「現実を見なさい！ 私たちはもう皇族ではないのよ！！」

デーブの母親がそう言ってシクシクと泣き出した。

デーブはその様子を一瞥すると、母親を置いて小屋を出た。

季節は冬で、外は凍えるほど寒い。

デーブは白い息を吐きながら、空腹に突き動かされ、森の中を彷徨った。

「何か……食べ物……」

もう何日もまともな食べ物をお口にしていなかった。

なんでもいいから口に入れられそうなものを探すが、冬の森の中には木の実一つすらない。

「くそ……なんでぼくちゃんがこんな目に……すべて……あのルクスのせいだ……」

惨めな立場に追い込まれたことに憤慨して、デーブはルクスのことを憎んだ。

だが皇子という立場すら失ったデーブにはどうすることもできない。

何も手に入れないまま森を歩いているうちに、デーブは体力の限界を迎え、地面に倒れた。

雪が体の上に降り積もるが、もう少しも動くことはできなかった。

「このまま……ぼくちゃんは死ぬのですか……こんなところで……」

朦朧とする意識の中で、誰かが自分のもとへ近づいてくる気配を感じ取った。

『お前がデーブ・エルドか？』

「え……？」

頭上から響くしゃがれた声に、デーブは最後の力を振り絞って顔を上げた。

『……』

「ひっ……!？」

紫色の肌の人物が、デーブを見下ろしていた。

デーブは一目見て、その人物が普通の人間でないことを理解した。

紫色の肌を持つ種族といえは一つしかない。

人類の大敵、すなわち魔族。

「やめ、ろ……来るな……」

実際に魔族を見たのは、これが初めてだった。

デーブは本能的な恐怖を覚え、逃げようとする。

だが、体は動かない。

そんな風に怯えるデーブを襲うでもなく、魔族はただじっと見下ろすだけだった。

『デーブ・エルド。随分落ちぶれたようだな?』

「なん……だと……?」

『皇族だったお前が、今では飢えて死にかけている……全く見るに耐えない情けない姿だ』

『黙れ魔族……汚れた種族が皇族のぼくちんを侮辱するな……』

『誰がお前をそこまで貶めた?』

「あ……?」

『魔族に怒りを向けるのは構わないが、お前をそんな状況にしたのは私たちか? 違っだろう。お

前には復讐の機会が必要はずだ』

「何が……言いたい……」

『ククク……』

デーブが話を聞く耳を持ったと察した魔族は、ニヤリと口元に笑みを浮かべた。

しゃがみ込み、至近距離でデーブを見る。

『復讐をしたくはないか……? お前をここまで貶めた連中に……』

『復讐……?』

『そつだ。俺ならお前に“力”を与えられる。お前が復讐を遂げられるだけの力を……』

『黙れ……魔族か……ぼくちんを騙そうとしているんだろ?』

『皇族ではなくなり、死にかけているお前を騙してなんの意味がある? 放っておいても死ぬお前

を騙して何か俺が得すると思うか?』

「うるさい……魔族になんて……ぼくちんは唆されないぞ……」

『そうか。ならばそこで勝手にのたれ死ね。デーブ・エルド』

魔族はそう言って、その場から立ち去っていく。

デーブは遠ざかっていく後ろ姿を見つめていたが、やがて耐えかねたように掠れた声を出した。

「待て……いや、待ってください……ぼくちんを……置いていかないで……」

『なんだ? 俺の話を聞く気になったか?』

魔族の反応は、まるでデーブが呼び止めるのをわかっていたかのようなものだった。

デーブは、藁にも縋る思いで魔族に問いかけた。

「さっきの話……カとはなんのことなのか……ぼくちに説明するのです……」

『ククク……そう来なくてはな……』

事実上の命乞いをしてきたデーブを見て、魔族はニヤリと口元に笑みを浮かべるのだった。



調度品で豪華に彩られた煌びやかな会場に、ゆったりとした演奏が響き渡る。

あちらこちらのテーブルの上に、古今東西から集められた美味や珍味が惜しげもなく並べられていた。

俺——ルクスが参加していたのは、婚約者であるエリザベートの母国、ブリターニヤ王国で特権階級たちが定期的に開くパーティーだ。

平民は一切の立ち入りを禁じられ、集められたのは各国を治める王侯貴族や皇族、士族のみ。

それぞれが伝統衣装や豪華なドレスで着飾り、ダンスや談笑を楽しんでいる。

各地の特権階級の者たちは、定期的にこのようなパーティーを開き、そこでコネクションを作ったり、自分の力を誇示したり、あるいは娘の嫁ぎ相手を探したりする。

出来損ないと帝国内で蔑まれていた頃の俺は、このような集まりに参加することはほとんどなかった。

だが、最近帝国での地位が高まったことで、こういう場に呼ばれることが増え、立場上辞退するわけにもいかなくなってきた。

特に今回に関しては、婚約者のエリザベートに関わるということもあり、彼女と彼女の国を立てる意味でも参加することにしたのだった。

「見ろ、エリザベート王女だ」

「なんて美しいんだ……」

「この世のものとは思えない……」

「お、おい……ユーベンス。エリザベート王女に声をかけてこい」

「む、無理ですよ、お父さん……僕には荷が重い……」

ドレスを着込み、装飾品で着飾り、お化粧を施された美しい貴族の娘たちがたくさんいる中、エリザベートは一際目立っていた。

このようなパーティーがあれば毎度のことなのだが、エリザベートはいつもその美しさで一番の注目を浴び、パーティーの華としてたくさんの男に言い寄られている。

「エリザベート様。どうか一曲踊っていただけませんか？」

「エリザベート様。あなたの噂はかねがね聞いていましたが、こうしてあなたを目の前にして噂は全部間違っていたことがわかりましたよ。あなたの美しさは言葉で表すことができない。まるで現世に降臨した女神のようだ」

「エリザベート様。この度カシミア王国の王位に就いたアルレルトと申します。ここへ招かれた時

からあなたに最初に挨拶をしようと思っていました。ぜひお耳に入りたいお話があるのですが、お時間はありますか」

エリザベートの周りには、自分の容姿や地位に自信のある者が次々と集まり、自分に自信のない者、あるいは国が小さく後ろ盾が心細い者が自ら引き下がっていく。

誰もがなんとかエリザベートの気を引こうと躍起になっているようだった。

エリザベートは、決して笑みを絶やさずに上品に振る舞いながら、彼らのアプローチをやんわりと断っていた。

「大変そうだな……」

毎回パーティーに参加する度に猛アプローチを受けるエリザベートを遠くから見ながら、俺は密かにエールを送る。

そこに一人の女性がやってきて、突然声をかけられた。

「あの……もしかしてルクス様ですか？」

「え……？」

「先のご活躍、私のものにも聞こえてきましたわ。なんでも兵士百人が束になっても敵わないモンスターをたった一人で華麗に討伐なさったとか」

「その話を聞いて、私感動しました。ルクス様はすごく勇敢な方なんですわ」

「私もルクス様の武勇をぜひ拝聴したいですわ」

最初は一人だけだと思っていたら、俺たちのやり取りを見ていた他の貴族の娘たちがやってきて、

取り囲まれてしまった。

さっきからやたらとチラチラ視線を感じるなと思っていたが、どうやら俺に話しかけるタイムニングを見計らっていたらしい。

美しい少女たちに取り囲まれて、武勇を聞かせてくれとせがまれ、ちよつとドキドキしてしまうが、気を緩めてはいけないと思い直した。

おそらく彼女たちは、次期皇帝に近いのが俺だと思っている親から、今のうちに取り入っておけと指示されているのだろう。

彼女たちが浮かべている笑顔やキラキラした眼差しも、多分作り物だ。

本気にはしていない。

自分にそう言い聞かせながら、俺は皇帝から依頼された“黒いモンスター”を討伐した話を彼女たちに語った。

少女たちは、話がモンスターと邂逅したところにさしかかるとハラハラしたような表情を見せ、討伐し終えたところを語ると、きゃあきゃあど黄色い歓声を上げる。

「すごいですわ！　なんてかっこいい！」

「ルクス様の魔法、一度見てみたいですよ！」

「まるで物語の騎士様みたい！　本当にかっこいいですよ、ルクス様」

「いやあ……それほど……」

打算ありきだとはわかっていても、褒められて悪い気はしない。

すごいすごいと美少女たちにほめそやされて、気づけば俺はすっかり頬が緩んでいた。

「じー」

「……っ!？」

突き刺さるような視線を感じて、俺は我に帰る。

「え、エリザベート!？」

少し離れたところから、エリザベートが俺にジト目を向けていた。

いつの間に王子たちの包囲網を抜け出してきたのだろうか。

「そ、それでは私は失礼して……」

「ルクス様。お話とても楽しかったですわ」

「またお話聞かせてくださいね、ルクス様」

俺の周りを取り囲んでいた娘たちがそそくさと逃げていく。

エリザベートがツカツカと歩み寄ってきて、俺を人差し指の先で突いた。

「もー、ルクスったら。デレツとした顔して」

「そ、そんな顔してた!？」

「してました。ずっと見てましたもん」

「……ご、ごめん」

俺は慌てて表情を引き締め直す。

「彼女たちに色々話を聞かれて……ちょっと浮かれてた……」

「別にいいですけど。全然いいですけど。全く気にしてませんけど」

そうは思えないような含みのある言い方で、エリザベートが頬を膨らませる。

「私が大人にならないといけないんでしょね……？ 私のこと、面倒臭い女って思ってますん？」

「お、思っていないよ……こ、婚約者は君だつてわかってるから……」

「……ならいいですけど」

一応機嫌を直してくれたらしいエリザベートの様子を見て、俺はほっと胸を撫で下ろす。

今後はもつと顔に出さないよう気をつけたいとな。

そんなことを考えていると、ふらりと俺たちのほうへ近づいてくる影があった。

「に、兄さん……」

俺の義兄であり、第二皇子のダストだった。

ダストは俺を睨むように一瞥すると、横にいるエリザベートに話しかけた。

「え、エリザベート様。俺のことを覚えていますか？」

「……」

「エ、エリザベート様……?」

「……すみません、どなたでしょうか？」

「なっ……」

エリザベートはつんと澄ました顔でそう言い放った。

衝撃を受けたダストは口をばくばくさせたあと、肩を落としてその場を立ち去る。

エリザベートに袖にされたダストが去っていくのを見てみると、今度は後ろから声をかけられた。「どうだルクスよ、楽しんでくれているか」

「ハ、ハロルド様!？」

振り返ると、柔和な笑みを浮かべたハロルド王が立っていた。

エリザベートの父であり、現ブリターニヤ王国国王、そしてこのパーティーの主催者。

エリザベートと同じ碧眼^{へきがん}が俺のことを見つめていた。

俺は突然の国王の来訪にかしこまって、地面に膝を突こうとする。

「よいよい、楽にしる。私とお前の仲ではないか、ルクス」

ハロルド王が、そんな俺の行動を制止して言葉を続ける。

「今日をよく来てくれた。お前とまた会える日を心待ちにしていた。何やらまた功績を立てたらしいな。色々と情報が私のもとにも入ってきているぞ」

「いえ……大したことは……」

「謙遜するな。もっと自分を誇るがいい。謙虚すぎるのもいかんぞ。お前はやがては皇帝になり、帝国を収める器、なのだろう？」

「は、はい」

「ふふふ」

ハロルド王が親しげな笑みを浮かべながら、俺の頭をポンポンと叩く。

「して、最近我が娘とはどうだ？ うまくいってるか？」

「それはもう」

俺が答えるより先に、エリザベートが俺の肩を取る。

「お父様。私とルクスの関係はとても良好です」

「ふふふ。娘は城でも何かにつけてお前のことを持ち出しているぞ、ルクスよ。今日のパーティーも、お前に会えるからと楽しみにしておったのだ」

「や、やめてください、お父様っ」

エリザベートが頬を赤くする。

ハロルド王は俺とエリザベートを交互に見て、ちよつとイタズラっぽく笑ってから俺に尋ねる。

「それで？ 二人はどこまで進んでいるのだ？」

「え……？」

「お、お父様……？」

「もうキスぐらいは済ませたのか？」

「……!？」

「き、きしゅっ!? そんなことしてませんっ」

突然の言葉に俺が驚愕している横で、慌てて手を振るエリザベート。

いきなりそんなことを言われて、俺もなんて答えていいかわからない。

「その反応だとまだのようだな。ふふふ。健全な付き合いをしているようで、父親として安心したぞ、エリザベート」

「もうっ、^{つか}揶揄わないでくださいお父様っ……」
エリザベートがハロルド王をポカポカと殴る。

「こちら、エリザベート。みんなが見ておるのだから、はしたない真似はやめなさい。そうそう、何人か、お前にも挨拶をしてもらわなくてはならない連中がいるから呼びに来たのを忘れておった。すまんが一緒に来てくれるか」

「嫌です。私はルクスと一緒にいます」

「私を困らせないでくれ。大事な貿易相手国の重鎮なのだ。お前は王女だろう。ちよつと顔を見せるだけだ。我慢してくれ」

「むう……せつかくルクスと二人きりで過ごせる貴重な時間なのに……」

「すまぬな、ルクスよ。少しの間、エリザベートを借りるぞ」

「わ、わかりました……!」

「ふふふ。娘がいない間に他の国の娘に色目を使つてはいかんぞ」

「そ、そんなこと絶対にしません」

「冗談じゃ。では、しばし失礼する」

ハロルド王はそう言つてエリザベートを連れて去つてしまった。

「ほっ……」

あれ以上話を掘り下げられなかったことに安堵して、俺は胸を撫で下ろしてから、会場を見渡した。

「おい見ろあれ……」

「エルフだ……」

「亜人がいるぞ……」

「穢^{けが}らしい亜人がどうしてこんなところに……」

「あの耳、なんて醜いんだ……」

にわかにパーティー会場がざわめき始めた。

どうやらたつた今、とある国の一行がパーティー会場に到着したようだった。

「あれが……エルフか……」

俺は思わず息を呑んだ。

会場へ入ってきたのは、野生的な伝統衣装に身を包んだ耳の長い少女たちだ。

エルフ族。いわゆる亜人と言われる種族である。

エルフ、ドワーフ、獣人、鳥人。

この世界には、人間に似ていながら体のどこかに別の種族の特徴を持つ者たち……亜人が存在する。エルフも亜人の一族であり、その特徴は長い耳と膨大な魔力。

森の奥に住み、人間とは全く違う伝統と魔法文化を築いていたエルフ族は、ここ百年で人間たちと交流を持つようになった。だが、人族の中にはいまだ亜人たちに対する偏見や差別があり、それは特権階級では特に顕著に見られる。

現に、エルフ族の人たちが会場に姿を見せた途端に、露骨に嫌な顔をする者や、あからさまな侮

蔑の言葉を吐く者たちがたくさんいた。

「穢らしいエルフがどうしてこんなところに……？」

「お父様。私怖いですわ。亜人って人間を食べるって言いますもの」

「私の後ろに隠れていなさい……全く、ハロルド王もなぜあのような亜人種を招いたりしたのか……」

近くからそんな言葉が聞こえてきたので、俺は声のするほうをきつく睨んだ。

会話をしていた親子が気まずそうにそそくさと離れていく。

俺はエルフ族の一行にもう一度視線を移した。

彼女たちは丁寧な所作で会場にいる人々にお辞儀をしたあと、主催者であるハロルド王のもとへ向かった。

「よく来てくれた。歓迎するぞ」

ハロルド王がエルフ族の一行を快く迎え入れる。

主催者であるハロルド王の態度を見て、先ほどまでエルフ族を嘲笑していた参加者たちは少しバツが悪そうな表情になる。

やがてパーティーが佳境に入ると、参加者たちはパートナーを見つけてダンスをし始める。

エリザベートは主催の娘として各国の重役に挨拶をして回っているようで、まだ戻ってきていない。

周りが次々ダンスの相手を見つける中、一人で立っているだけの俺が気になったのか、貴族の娘

たちが次々に誘ってくる。

「ルクス様。よかったら私と一曲踊ってくださいませんか？」

「ルクス様。ダンスのお相手をお探しますか？ 私ではければお相手を務めますわ」

次々にお誘いの言葉をもらうが、ハロルド王から浮気はダメだぞと釘を刺されたばかりだ。

彼女たちの誘いを受けるわけにもいかず、俺はやりわりと断る。

「すみません。お誘いは嬉しいのですが、もう相手は決まっていますのです」

「あら、そうですの」

「残念です。ではまたの機会に」

少しの気まずさと心苦しさを覚えながら、俺がパーティーの終了を心の中で願っていると、貴族たちがひそひそと話す声が耳に入った。

「おい、あれみろ」

「くくく……ダンスの相手がいなくて困っているみたいだな……」

「そりゃそうだ。誰が亜人と踊りたいものか」

「この状況で一曲も踊っていないなんて、何しに来たのだ？ あの亜人は」

「無様ね。私があの子の立場なら今すぐここを立ち去るわ」

そう蔑む貴族たちの視線の先にいたのは、先ほどのエルフ族の集団の一人……従者を侍らせ真ん中を歩いていた一際美しいエルフの少女だった。

周りの反応を見る限り、ダンスの相手が見つからず、手持ち無沙汰な状態のようだ。

このような集まりで、ダンスの相手が見つからないというのは非常に屈辱的なことだ。なぜなら容姿、そして家柄ともに価値がないと言われているようなものだからだ。

だが、エルフの少女の容姿は周りから嘲笑の的になるようなものではなく、むしろ誰の目から見ても整っており、美しかった。

おそらくこの会場の中で、エリザベートと張り合えるくらいの美貌ではあるだろう。

ただ、亜人だからというだけの理由で、参加者たちが少女のことを誘っていないのは明白だった。エルフの少女は、ダンスの相手が見つからないことを恥じているのか、もじもじとしてとても居心地悪そうにしていた。

「くそ……人間どもめ……」

「姫様、ここでお待ちを。必ずダンスのお相手を連れてきますので」

「わ、私は大丈夫ですから……」

「いえ、このような扱い、とても看過できません」

「姫様は程度の低い人間どもの嘲笑など相手にせず、堂々となさっていてください」

自分たちの主にこれ以上恥をかかせられないと、従者たちが動き出した。

周りで見ている貴族の参加者……特に若い男性に話しかけ、ダンスの相手を務めてもらえないか働きかけている。

「誰か、姫様のダンスのお相手をしてくれる者はおりませぬか」

「姫様がダンスの相手をご希望です。どなたかぜひ」

「いやあ、僕は遠慮しておこう」

「すみませんねえ。もう相手がいるもので」

「自分はダンスが苦手です。お役に立てず申し訳ない。ククク」

だが、従者たちの働きかけも虚しく、なかなか相手は見つからない。

声をかけられた男はみな、貴族らしい建前を駆使して断っている。

だが、本音では亜人と踊れば自分の名が落ちると考えているだろうことは見え透いていた。

「くそ……どいつもこいつも……すみません姫様……まさかここまで人間どもが愚かだとは……」

「うう……ごめんなさい……私のせいで……」

ダンスの相手が見つからないことに従者は苛立ち、エルフの少女は悲しそうに顔を伏せた。

「む？」

「あ……」

何かしてやれることはないかと俺が見守っていると、従者の一人と目が合う。

「そのあなた」

「は、はい……！」

従者は、そのままつかつかと俺のほうへ歩み寄ってくる。

「どうか姫様と一曲踊ってはくれませんか？」

「え、えっと……」

俺は戸惑いながら周囲を見回した。



「おい……見ろ。エルフどもがルクス第七皇子に声をかけたぞ」

「帝国の皇子ともあろう高貴な身分の者がまさか亜人の誘いに乗るなんてことないよな」
「さて、どう対応するか見ものだな」

周りの貴族たちが、興味津々といった様子で俺を見ている。

この状況をどうにかしてあげたい一方で、エリザベートとハロルド王の顔が頭^{よき}に過る。

二人のことを考えれば、誘いに応じるのはまずいよな……

ふとそこで、従者の背後にいるエルフの姫様の不安げな瞳が見えた。

いや、エリザベートには何か言われたらしっかり説明しよう。

ここでハロルド王が招いた賓客に恥をかかせるほうがよくないはずだ。

俺は少し考えてから、意を決して従者に答える。

「わかりました。踊りましょう」

周囲でざわめきが起こった。

厳しかったエルフの従者の表情が明るくなり、姫様の顔が驚きに染まる。

「いいのですか!？」

「ええ、構いませんよ」

エルフの姫様のダンスの相手を引き受けた俺は、従者に連れられて本人の目の前にやってきた。

「初めまして。帝国の第七皇子、ルクスと申します。あなたのお名前をお伺いしても？」

俺は作法に従ってエルフの姫様の手を取り、軽く口づけをしたあと、名前を尋ねた。

「あ、あの……ル、ルナミリアと申します。エルフの国エルフィーヤから参りました……その、本当に私と踊ってくださいるのですか？」

ルナミリアと名乗った少女がおそろおそろ問いかけた。

「もちろんです。自分では相応しくないのでしょいか？」

「い、いえ……！ 決してそんなことはありません……むしろ私のほうが相応しくないかも……エルフですし……」

ちよつと申し訳なさそうに呟くルナミリアに、俺ははつきり答えた。

「知っています。何か問題がありますか？」

「え、えつと……人間の方々には私たちのその……耳が……とても醜く見えると伺っています……あなたは嫌ではないですか？」

「醜くなんてありません。あなたみたいな美しい人が醜いわけないでしょう」

「……！」

俺の返答を聞き、ルナミリアの耳がぴこぴこと動いた。頬が上気しているのがわかる。

「う、嬉しいです……あなたにそう言っていただけで……」

「はい。あなたが会場に入ってきた時、正直見惚れてしまいました」

「……っ……で、でも……その……私とダンスすること……あなたの評判を落としてしまいませんか？」

「え……？」

「あなたの気持ちはわかりました。でも……今ここにいるあなた以外の人々が私に対してどういう気持ちを抱いているのかも……なんとなく理解しているつもりです。私とダンスすることでああなたの名を汚してしまわないか、私は心配です」

そう言つてルナミリアは周囲を見回す。

周りにいる貴族や王族たちは、俺たちがどうするかを観察しているようだった。

中にはルナミリアをダンスの相手に選んだ俺に対して、明らかに嘲笑するような視線を送ってくる者もいる。

このままでは、ルナミリアが萎縮してしまうな。

俺はエリザベートに心の中で詫びつつ、彼らから視線を外してから、もう一度ルナミリアをまっすぐに見て言った。

「評判などどうでもいいです。自分はあなたと踊りたい」

「……！」

「受けてくれますか？」

「……はい」

ルナミリアが頬を赤く染めて、こくりと頷いた。

俺がルナミリアに手を差し出すと、ほぼ同時に次の曲が流れ出す。

「あっ……やっ……」

「大丈夫。落ち着いて……自分がリードしますから」

「はいっ」

ルナミリアはこういう場に参加するのが初めてなのか、ダンスに不慣れな様子で足取りも^{おぼつか}覚束なかった。

俺はなるべく激しい動きはせずに、ルナミリアをリードしながらステップを踏む。

ルナミリアはだんだんと要領を掴んできていて、曲の最後のほうには二人の息はかなり合うようになっていた。

曲が終わると、パチパチとまばらな拍手が起こる。

ルナミリアが優雅に踊るさまはとても美しかった。

亜人に対して偏見を持っている人々も、ルナミリアの美しさや可憐さに圧倒されたようだった。素直に拍手を送って賞賛する者もいれば、悔しげに睨む者もいたが、いずれにしても先ほどまでのエルフを馬鹿にしたような反応はすっかりなくなっていた。

「はあ……はあ……なんとか……踊れました……」

「上手でしたよ、ルナミリアさん」

「あ、ありがとうございます……あなたが優しくリードしてくれたおかげです……」

ルナミリアが自分の胸に手を当ててホッと息を吐いた。

「もしかしてこのような場に参加するのは初めてですか？」

「は、はい……元々は父が参加する予定だったのですが、病気で倒れて……急遽私がエルフィーヤの代表として参加すること……」

「なるほど。それは大変でしたね。何かわからないことがあればなんでも言ってください。力になりますよ」

「あ、ありがとうございます……！ ですが、そ、その……どうして私にそこまで親切にしてくださいのですか？」

ルナミリアが不思議そうに俺を見てきた。

彼女からしたら、エルフを差別しない貴族や王族は珍しいのかもしれない。

「えっと……それはですね……」

俺は頭をかきながら答えた。

「なんていうか……あなたが昔の自分に重なるというか……」

後宮で散々出来損ないと嘲笑われ、^{あざむかれ}虐げられていた頃の自分。

味方はおらず、一人で実力を磨くしかなかったあの時の孤独な自身の境遇に、ルナミリアを知らずのうちに重ねてしまっていたのかもしれない。

「私を……憐れんでくださったからだったんですね」

少しだけルナミリアの声が沈んだものになった。

「……い、いや……そんな理由じゃ……」

「ルクス様は優しい人です」

「ル、ルナミリアさん、俺は……」

「ありがとうございます。あなたがしてくださったこと忘れません。でも……これ以上はやはり

あなたに迷惑をかけてしまいそうなので、私はこれで……」

「待ってくれ……」

立ち去ろうとするルナミリアを引き止めようと、俺は咄嗟にルナミリアの耳に触れた。

可哀想に思ったことが理由だと勘違いされたまま終わりたくなかったからだ。

たしかエルフの国の風習では、耳に触れるのには何か特別な意味があったと書物で読んだ。記憶は定かではないが、信頼とかそういういったものだったはず。

これで少しでもルナミリアの気持ちが晴れば……そう思ったのだが、彼女のリアクションは俺が考えているものと少し違っていた。

「ふえ!？」

ルナミリアの口から驚きの声が漏れる。

「な、なんと……!？」

「そんな大胆な!」

ルナミリアだけでなく、周りで見守っていた彼女の従者たちもざわつき出した。

あれ、ひよつとして俺、何かやらかしたか？

「ル、ルクス様……っ……これはいったい……?」

先ほどダンスをしていた時以上に顔を真っ赤にしながら、ルナミリアが俺を見てくる。

「え、えっと……こ、これが自分の気持ち、です……」

もしかしたら失礼なことをしたのではないかと思いつつ、俺は率直に自分の考えをぶつけた。

「~~~~っ」

ルナミリアが耳の先まで真っ赤に染めて、顔を伏せる。

「ル、ルナミリアさん……?」

「す、すみません……今すぐにお返事することはできません……!」

「え……?」

「それじゃあっ」

「あっ」

俺が何か言葉が続けるより先に、ルナミリアは逃げるようにして俺の目の前からいなくなってしまうた。

「ルクス? 見てましたよ?」

「ひい!？」

ルナミリアが去ってすぐに、入れ替わるようにしてエリザベートに声をかけられる。

要人たちへの挨拶はもう終わったらしい。

一見にこやかな笑みを浮かべているように見えるが、そう見えるだけでこれが全然笑顔じゃないことはわかる。

「私が離れてるからって、ずいぶん羽目を外していたみたいですね? バレないとも思っ
たんですかあ? ずっと見てましたからねえ?」

エリザベートに咎められた俺は、すかさず首を横に振る。

「ち、違うんだ、エリザベート。話を聞いてくれ」

どうやらルナミリアとダンスしていたところをエリザベートにばったり見られていたらしい。あれが下心からとった行動じゃないことをなんとかエリザベートにわかってもらわなければ。

「ずいぶん楽しそうに踊ってましたね？ 何か言い訳があるんですか？」

「そ、その……なんていうか……」

俺が上手く弁解できず困っていると、ハロルド王がやってきた。

「これこれ、娘よ。あまり婚約者を困らせるな。ルクスの行動の真意には気づいているんだろう？」

「ハ、ハロルド様……」

ハロルド王が助け舟を出してくれる。

「残念ながら人間社会、特に貴族の間ではいまだに根強く垂人への差別感情が残っている。エルフ族が今日ここに集まった連中にどう思われているか、わからないわけではあるまい？」

「……し、知ってます。お父様。なんとなくそんな気はしてましたから」

「ルクスはみんなから蔑まれ、ダンスの相手を見つけることができなかったエルフの姫君に手を差し伸べたのだ。この行為を咎めるのはいくら婚約者であるお前にもできないだろう」

「……そうですけど」

「か、勝手なことをしてごめん。エリザベート」

「別にいいです。ただ……ルクスって誰にでも優しいんですね」

「え……」

「私、お腹が空きました」

エリザベートはそう言って、食事の並ぶテーブルのほうにツカツカと歩いて行ってしまった。

残された俺は、遠くなっていくエリザベートの背中を見つめることしかできなかった。

「ルクスよ。お前のとった行動は何も間違っていないかったぞ」

「そうでしょうか」

「むしろ立派だった。あのままルナミリアがダンスの相手を見つけることができなかったら、エルフの国の姫君のみならずエルフィーヤ王国の威信を傷つける結果となった。そうなった場合、彼女たちを招いた主催者である私にも責任があることになり、国同士の今後の関係にも影響が出ておかしくなかった。周りの貴族どものくだらない偏見をものともせず、エルフの姫君とダンスを踊ってくれたお前に、私は感謝しているぞ」

「……はい」

「娘のことは心配するな。別に娘もバカじゃない。一度ダンスをしたからといってお前がエルフの姫君に心移したなどとは思っていない。ただ……少し複雑な年齢だからな。そこはわかってやってくれ」

「……はい」

俺が頷くと、ハロルド王は柔和な笑みを浮かべた。

「よし。では……そろそろパーティーはお開きとしようか。娘には私がお前の代わりに上手く言っておく。何、どうせ翌日には機嫌を直してお前に会いたいと言い出すだろう。そこは大船に乗った

つもりでいてくれ」

「……お願いします」

その後、ハロルド王が壇上に上がり、締め挨拶をしたところでパーティーはお開きになったのだった。

後日、エリザベートからこんな手紙が届いた。

ルクスへ

この間は八つ当たりをしてしまつてごめんなさい。

私、ルクスのとつた行動を誇りに思います。

お父様もルクスの行動に感謝しているとおっしゃっていました。

でもやっぱりルクスが他の女の子に優しくしているのを見ると私は不安になってしまいます。

だから、他の女の子に優しくするのはいいですが、私に一番優しくしてください。

絶対にそうしてください。

約束ですよ？

最後に。

大人になりきれない私を許してくださいね。

エリザベートより

「はあ……」

どうやら手紙の文面を読むに、ハロルド王は約束を果たしてくれたようだ。

俺はホッと胸を撫で下ろし、ハロルド王に心の中で感謝しながら、エリザベートへの手紙をしたためるのだった。

第二話 異文化交流

「ルクスくん、おはよう」

「ニーナか。おはよう」

帝国魔法学園へ向けて歩いてっていると、同級生のニーナに声をかけられた。

俺たちは一緒に並んで教室へと向かう。

「聞いたよ、ルクスくん。なんか……すごい剣を皇帝から賜^{たまわ}ったんだよね？」

「ああ。実はそうなんだ」

俺が「黒いモンスター」を倒した報酬として皇帝よりダモクレスの剣を授かったことは、すでに全帝国民の知るところとなっている。

「私あんまり詳しくないけど、すごい強いモンスターを倒したんだよね？」

「まあ、そんな感じだ」

「だ、大丈夫だった？ 怪我とかは？」

「問題ない。心配してくれてありがとう」

「そっかあ。よかったあ」

ニーナがホッとしたように胸を撫で下ろした。

「なんかこうして活躍の話を聞いていると、ルクスくんがどんどん遠くに行っちゃう気がするなあ……私、こうやってルクスくんと一緒に歩いてて本当に大丈夫？」

「学校にいる時の俺はただの学生だよ。これまで通り接してくれるとありがたい」

「わかった。ルクスくんがそう言うなら」

実際、皇子という立場を気にせずに接してくれるニーナやクラスの連中の存在は、俺にとってはありがたい。

息の詰まる皇族の立場を忘れられるからだ。

「あ、そういえばルクスくん。あの噂聞いた？」

「噂？」

「ほら、うちの学校に他国から交流学生が来るっていう話」

「交流学生？」

「そうだよ。なんでも人間の国じゃなくてエルフの国から学生さんがたくさん来るんだって」

「エルフの国……？」

「たしかエルフイーヤ王国っていう名前だったと思うんだけど」

「エルファイヤ王国……それって、たしかなのか？」

つい数日前にブリターニヤ王国でのパーティーで関わったばかりだ。

馴染みある名前が出たことに俺は驚き、頭の中にとある少女の顔が思い浮かんだ。

「え、もしかして何か知ってるの、ルクスくん」

「いや……なんでもない……」

「エルフの国の魔法学生ってどんな感じなんだろう？ 私興味があるなあ。エルフは人間族よりも魔力が多くて魔法にも長けてるって言うし、すごい人たちが来るかも……あ、もしかしてあれがそうなんじゃない？」

あくまでエルフを始めとした亜人への差別意識を持っているのは、貴族がほとんどで、身分が高くない者にはそれほどこの考えは浸透していないようだ。

その証拠に、ニーナはエルフとの出会いを楽しみにしていた。

俺はニーナが指差した視線の先に目を向ける。

そこでは見慣れない制服に身を包んだ一行が、足止めを喰らっていた。

おそらくエルフたちであろう集団の周りには、帝国魔法学校の生徒たちが野次馬のように集まっている。

「なんか揉めてない？ 大丈夫かな？」

「ちよつと様子を見てくる」

「あ、ルクスくん!？」

一行の一番先頭に見覚えのある後ろ姿を見つけた俺は、ハラハラした様子で見ているニーナに一声かけてから、小走りでその一向に近づいていく。

「汚れたエルフがどうしてこんなところにいるのかな？」

聞き覚えのある不快な声が、耳に入った。

こいつは、クラス対抗戦でも散々俺たちのクラスを馬鹿にしていた元Aクラスのロベルト・シュタインだ。

おそらく彼が、エルフ一行の前に立ちはだかつて邪魔しているのだろう。

全員の顔が見える位置まで近づくと、ルナミアを先頭としているエルフたちに向かって、ロベルトが見下すような視線を向けているのが目に入った。

「ここは人間の通う魔法学校だよ？ 亜人が立ち入っていい場所じゃない。誰の許可を得て君たちはここにいるんだい？」

「わ、私たちは交流学生団として、この度帝国魔法学校に招かれたエルキア魔法女学院の学生団です。話は、帝国魔法学校の学長様に通っているはずです」

おそらくニーナはどこから噂で聞いたのだろうが、学生の大半はまだエルフたちが訪問することを知らされていなかったようだ。

ロベルトは疑わしげな目を向けながら、鼻で笑った。

「はっ。亜人の君たちと人間の僕たちが交流？ 冗談はよしてくれ。そんなことできるはずがないだろう？」

「……っ」

ロベルトが馬鹿にした様子で嘲笑ったのを見て、ルナミアが顔を真っ赤にする。見かねた俺は思わず横から二人の間に割り込む。

「おい、ロベルト。何してんだお前」

「ル、ルクス様!？」

「ちっ……面倒なやつが来たな……」

ルナミリアが驚きの声を上げ、ロベルトは苛立たしげに舌打ちした。

俺はルナミリアに無礼な振る舞いばかりするロベルトに詰め寄る。

「こんなところで何してるんだ、ロベルト」

「うるさいな。僕はただ、汚れた巫人が学校の敷地にいるのが見えたから追い払おうとしただけだ」

「彼女たちは交流学生としてここにいるんだ。別に何もおかしくない。それよりお前のしていることのほうが無茶苦茶だ。今すぐに謝れ」

「……君の指図は受けたくないね」

「だったら早くここから立ち去れ」

「……ふん」

俺が来たことで流石に分が悪いと思ったのか、ロベルトは鼻を鳴らして、その場から立ち去った。俺は振り返り、ロベルトに代わって、ルナミリアたちエルフの集団に謝罪する。

「すまないルナミリア。あいつの代わりに俺が謝る。無礼を働いて申し訳ない」

「い、いえ……私は大丈夫ですから。そ、その……またあなたに会うことができて嬉しいです、ルクス様」

ルナミリアはそう言って微笑んでから、頬と耳を赤く染めて俯いたのだった。

「うわ……めっちゃ可愛い……」

「美しい……」

「エルフってみんな容姿端麗って聞いてたけど本当だったんだ……」

クラスメイトたちはみな、教室の前にいる数人のエルフたちに見惚れていた。

交流学生としてやってきたエルフ一行は、どうやら学園の代表とも言えるAクラスに配属されるらしい。

今年は基本的にエルフに差別意識がない面々がAクラスだからよかったものの、去年まではどうしていたのだろう。

教壇に立ったリーザ先生が、例のごとおぎなりの調子で簡単に交流学生の話の切り出す。

ルナミリアを始めとするエルフの女生徒たちは、クラスのみんなの注目を浴びて恥ずかしそうにしている。

「もう聞いている者もいると思うが、今日からこのクラスにエルキア魔法女学院の生徒が入ることになった。お前ら仲良くしてやれよ。よーし、それじゃあ、自己紹介をしてもらおうかー。一人ずつここに立って順番にやってってくれ」

リーザ先生がエルフの女生徒たちを手招きで誘導する。

エルフの少女たちは互いに顔を見合わせて相談するようなそぶりを見せた。

「そ、それではまず私が……」

話し合った末、ルナミアが先陣を切るようになったようだ。

彼女は緊張した面持ちで教壇に立ち、こほんと咳払いをしてから、みんなの前で自己紹介をした。
「エ、エルフィーヤ王国のエルキア魔法女学院から来ました、ルナミアと申します。よろしくお願います」

パチパチと拍手が起った。

「確かエルフのお姫様なんだよな!？」

「すげえ……こんな可愛い子が短い期間とはいえ同じクラスになるとか神かよ……!」

「ルナミアさん……いや、ルナミア様万歳!」

一部では歓声に近い声も上がっている。

男子を中心に、ルナミア率いるエルキア魔法女学院の交流学生たちは、歓迎の反応をもつて受け入れられた。

エルフの少女たちは、周りの反応を見てホッと胸を撫で下ろしたり、恥ずかしそうに俯いたりしている。

エルフたちの自己紹介が終わると、リーザが説明を始めた。

「交流学生は互いの国の魔法技術を学び合い、高めるために始まった制度だからな。エルフの国の魔法使いは多分お前らよりもずっと魔法に関して優秀だろうから、お前ら色々学んで吸収しろよ。それと彼女たちはおそらくこつちの風習とかそういうのに疎いだろうから、ちゃんと教えてやれよ。まじ頼んだからな」

自分でやるのが面倒なのか、リーザ先生はそんな感じで話をまとめた。

生徒に丸投げする気満々だな。

いつもならそんなリーザ先生の態度に生徒たちがうんざりするところまでお決まりのだが、今回は反応が違う。

「任せてください、リーザ先生!」

「ルナミアさん! わからないことがあったら俺たちになんでも聞いてくれ! 代わりにエルフの国のこといっぱい教えてくれよな!」

「ルナミアさんまじで可愛い! その髪型どうやって作ってるの!？」

よほどみんなルナミアたちへの関心が高いのか、早くも生徒たちによるルナミアたちへの質問攻めが始まってしまった。

まだリーザ先生の説明が続くような感じもあったが、それすらお構いなしだ。

生徒たちは、ルナミアたちの周りを取り囲み、エルフの国のことや魔法のことについてあれこれ質問を始める。

「え、えっと、これはですね……」

エルフの少女たちは、戸惑いつつも、どこか嬉しげに興味津々なクラスメイトたちの質問に答えていた。

「ふむ……この様子なら大丈夫そうだな。よし、その調子で頼むぞ。くれぐれも無礼なことはいすんなよ。一応ルナミアは向こうの王女なんだからな」

「わ、私のことは気にせず、一生徒として接してください！」

「だそうだ。お前ら、よかったなー」

「ありがとうルナミリアさん！ ルナちゃんって呼んでいい？」

「ルナちゃん私と友達になって！」

「は、はい……！ 私なんかでよろしければぜひ」

リーザ先生はワイワイガヤガヤと楽しそうに盛り上がる生徒たちを見て頷くと、教室を出ていった。

俺は微笑ましいやり取りをしているエルフの少女たちとクラスメイトを、遠巻きに見守るのだった。

ルナミリアたちがクラスに加わってから、最初の授業が始まった。

内容は魔法実技だ。

「こっちだよルナちゃん」

「大体実技の授業は訓練用の広場でやるんだよ」

クラスメイトのうちの数名が、すっかりルナミリア率いるエルフの少女たちの案内役になっているようで、魔法実技用の訓練広場へ先導していた。

まだクラスに加わって一日目だというのに、ルナミリアたち交流学生は、すっかり人気者だ。

ルナミリアにいたっては、すでにルナちゃんという愛称までついていて、クラスメイトたちの距

離もかなり縮まっているようだった。

「よし、集まったなお前ら」

リーザ先生が生徒たちを見回して、話し始める。

「じゃあ早速だが、面倒な儀式を先に済ませておくぞ。お前らもう模擬戦の代表は選んだか？」

「え？ 模擬戦の代表？」

「なんのこと？」

突然の問いかけに、クラスのみんなが困惑していると、リーザ先生がやってしまったという表情で、額を叩いた。

「あれ、言ってなかったか？ 交流学生が来た時は、互いの代表同士で、魔法戦の模擬戦をやるっていうお決まりみたいなもんがあるんだよ。お前らに誰が代表やるか決めとけて話してなかったっけ？」

「聞いてませーん」

「そんな話一言も聞いてないんですけど」

当然のようにクラスメイトたちからブーイングが上がるが、リーザ先生は開き直ったように言う。「今言ったろ。ほら、さっさと代表選べ」

「ええ!?」

「いきなりかよ、流石に適當がすぎるぞこの先生」

「いいから早くしろー」

若干横暴だが、しきたりである以上無下にもできない。

だが、流石に話がいきなりすぎてみんな手を挙げられずにいた。

「お前行けよ」

「む、無理だ……」

「ル、ルナちゃんたちと戦いたくないよね……」

「エルフって人間よりも強いんでしょ？ 私たちじゃ無理だよ……」

「ルナミリアちゃんの魔法で打ちのめされるなら本望かも……」

「お前は黙ってる」

自分が引き受けるとは誰も言えずに、互いに代表を押し付け合うクラスメイトたち。

中には、エルフの未知の力を前に尻込みしている者もいた。

「ど、どうする……？ 誰が行く？」

「やっぱりここは……」

「一人しかないよな……？」

話の決着がどうなるのかと俺が行く末を見守っていたら、みんなの視線がなぜか俺に集中し始めた。

「もしかして……俺？」

自分を指さすと、みんながうんうんと頷く。

「す、すまんルクス……頼めるか？」

「ルクスくん、お願いしてもいいかな？」

「やっぱりお前しかいねえよ！ ここは頼んだ！」

「やっぱり一番強いやつが行くべきだよな！」

クラスメイトたちが懇願するように俺を見てくる。

「……わ、わかった……」

どうせここで断つても、誰か他のクラスメイトが立候補することはまずないだろう。

俺は渋々代表を引き受けた。

向こうの代表は誰になるのだろうか。

「姫様、私が行きましょう」

「セイラ。あなたに託しました」

「お任せください。エルキア魔法女学院の代表として恥じぬ戦いをしてみせます」

エルフたちの中から一歩前に出てきたのは、いつもルナミリアのそばにいる長身のエルフだった。たしかハロルド王のパーティーで、俺にルナミリアと踊るよう声をかけてきたのも彼女だったはず。

セイラと呼ばれた少女は、俺の目の前までやってくると正面からこちらを見据えてくる。

「やはり代表はあなたになりましたか、ルクスさん」

「さん、はいらないぞ。クラスメイトだしな。ええと……セイラ、でいいのか？」

「はい。普段はルナミリア様の護衛も務めているセイラだ。今回私がエルキア魔法女学院側の代表

として戦うことになった。よろしく頼む」

「よろしく」

俺はセイラから差し出された手を握る。

「……悪いが手加減をするつもりはない、ルクス」

「え……？」

だが、握手した瞬間、セイラの眼光が鋭くなった。

「姫様の守り人として……私はお前を試さなくてはならない。本当に姫様に相応しい人かどうか」

「相応しい……ってどういうことだ？」

なんの話かさっぱり見えてこず、俺はセイラに聞き返す。

「まさかいきなり姫様に対してあのような求め方をしてくるとはな。いささか無礼ではあったが……しかし同時に男らしくもあった。姫様も……気分を害したわけでもないようだ」

そこまで聞いて、セイラが言っているのが先日のパティーでの俺の振る舞いに関してだったということを理解する。

「……ああ……なるほど。そういうことか」

俺が咄嗟にルナミアの耳を触つてしまい、信頼の意図を伝えようとした件。

姫という高貴な身分に対して無礼な振る舞いであつたと咎められるかと思つたが、セイラ曰くルナミアはそこまで気分を害したわけではないらしい。

ただ、いくらダンスの相手になつたとはいえ、会つてわずかしら経っていないような相手を信じ

ていいものか決めかねている。そんなところだろう。

だから、この模擬戦で俺の実力を図ろうとしているということだ。

ここで認めてもらえれば、この前憐れんだと思われていた誤解も解けそうだとわかり、俺は少しやる気になった。

「そういうことならこつちも手加減はしない。俺の気持ちは本当だからな」

きゃああつ、と背後のエルフの少女たちから悲鳴が上がり、ルナミアが顔を真っ赤にして俯いた。

「だ、大胆なやつめ……」

目の前にいたセイラまで、何やら頬を赤くして、若干驚いたような顔で俺を見ている。

俺はエルフの少女たちの反応に首を傾げた。

あれ？ また何かおかしいことを言つたか？

ただ友達になりたいってことだったんだが、なんだこの反応は。

俺が不思議そうに周囲を見回す中、セイラがゴホンゴホンと咳払いしてから言つた。

「だが……男らしいのは嫌いじゃない。その心意気やよし。さあ、いざ尋常に、戦おうじゃないか」

「望むところだ」

少し気になるころはあるものの、審判のリーザ先生に声をかけられ、俺は目の前の相手に集中することにした。

セイラと俺は十メートルぐらいの距離を置いて向かい合った。

俺のそばにAクラスの生徒たち、そしてセイラ側にエルキア魔法女学院のエルフたちが立ち、勝負の行く末を見守っている。

「人間と勝負するのは初めてだ、ルクス」

試合が始まる前にそう言っ、自信ありげな笑みを浮かべるセイラ。

「俺も、エルフと戦うのは初めてだ」

「そうか」

俺の言葉を聞いて、セイラが不敵に笑う。

「ならばエルフの誇りにかけてお前を倒す。我々の戦い方を、受け継がれし魔法の神髄を、お前の体に刻み込んでやる」

「望むところだ」

互いに挑発を続ける俺とセイラ。

リーザ先生の不手際のせい、なりゆきで代表になったとはいえ、負けるつもりは毛頭ない。俺たちの挑発の応酬に、見物しているクラスメイトたちは大盛り上がりだ。

「うおおおおお！ これは熱いぞ！」

「絶対に負けるんじゃないぞルクス！」

「ルクスくん頑張っ！」

「負けないでルクスくん！」

「任せてくれ」

セイラに俺の存在を認めさせて、ルナミリアと友人関係を築く。

もしエルフの国の姫君と親しい関係を構築できれば、今後の継承者争いにおいても、必ず有利になるはずだ。

向かい側ではエルキア魔法女学院の少女たちがセイラにエールを送っていた。

「セイラ様、頑張ってください！」

「セイラさん頑張っ！」

「私たちエルフの力を見せてやりましょう！」

続けてルナミリアがセイラを応援する。

「セ、セイラ……！ 頑張ってください！ でも……あ、あんまり本気を出してはダメですよ……？ あなたは強いのですから。ル、ルクス様に怪我をさせてはいけません……」

「わかっております、姫様。彼は姫様にとって、今後大切な存在になるのですから。そんな相手に大怪我を負わせるようなことはしません」

「わ、私はまだそんなつもりは……」

だが、セイラの言葉はどこか歯切れが悪くところどころモニョモニョ言っている部分があった。やり取りを終えたルナミリアをチラッと見ると、頬を赤く染めていた。

審判のリーザ先生が俺たちの間に入り、口を開いた。

「よし、それじゃあ、両者とも準備はいいな？ 一応この模擬戦は慣習みたいなものでそこまで